

〈翻 訳〉

エコノミクス
第2巻第3・4号
1998年3月

ザバヌー・ギッフオード著

『トマス・クラークソンと反奴隷制運動』(その2)

徳島 達朗

翻訳

Zerbanoo Gifford, *Thomas Clarkson and the Campaign Against Slavery*. 1996, Anti-Slavery International. London.

ザバヌー・ギッフオード著『トマス・クラークソンと反奴隷制運動』(1996年, 国際反奴隷制協会発行 ロンドン) (その2)

オラウダ・エキアノの興味深い生涯

エキアノ・オラウダはエサッカのイボ〔現在のナイジェリアの東部〕で、長老であり、聖職者の地位にある者の息子として生まれた。彼は10歳の時、アフリカ人奴隷取扱業者に妹も一緒に捕らえられ、ニジェール・デルタで奴隷商人に売られた。その時、彼は知る由もなかったが、エキアノは故郷や家族を再び見る事はなかったのである。

子どもの時、青年時代にエキアノは何回も売られ、西インド、イングランドへはもちろん、海軍のキャプテン、パスカルに買われた時などは、カナダ、地中海へも旅している。これは当たり前だが、エキアノは奴隷所有者によって幾度も名前を変えられた。最初は、マイケル、次がヤコブ、それからパスカル大尉の時は、スエーデン王にちなんで古典的なグスタフ・バッサで

あった。彼は忠実な召使いの解放を約束していたにもかかわらず、フィラデルフィア出身のクエーカー教徒、ロバート・キングにエキアノを売ったのは他ならぬこのパスカルであった。キングはエキアノを多少は大事に扱い、ある程度の権利も与えた。彼はキングのために船員として、召使いとして、事務員として働いた。そして港での自分の小商いで若干の資金をなんとか貯める事ができた。エキアノはキングに仕えている間に、自由を買い取る40ポンドを貯める事ができた。そしてキングに解放を懇願した。クエーカー教徒であり、約束は守る男であったが、キングは知恵があり忠実なエキアノを手放すのをためらった。その結果、エキアノおよび船長の共通の友人である、トマス・ファーマーが説き伏せねばならなかった。

1766年、21歳の時に、エキアノは自由人として海員の生活に戻った。何年もの間、彼は地中海をめぐり、中央アメリカのモスキート海岸や北極地方へ航海した。ロンドンではエキアノは貧しい黒人が、1786年の自由アフリカ・シエラ・レオネでの生活を可能にする計画に積極的に参加した。彼は兵站部将校の役目を与えられ、白人と黒人、両社会の交流のうえで重要な人物となった。しかしながら、エキアノは正義感が強すぎ、議論も道徳的過ぎると評価され、結局、彼は不評を買い計画から外され、失敗してアフリカへ戻っていった。

その結果として生じた前向きな成果のひとつは、1789年にエキアノが奴隷の口述という形式で彼の一生の物語を刊行したことである。その題は『自伝物語：アフリカ人オラウダ・エキアノまたはグスタフス・バッサの興味あふれる一生』という。この本はちょうどバスチーユが陥落し、さらにフランス革命がヨーロッパを震撼させた、その同じ年に刊行されたものではあるけれども、エキアノの物語はその時代の革命的な精神を取り入れているわけではない。エキアノは積極的な宣伝家であり広報担当者であったが、彼は奴隷制の悪を糾弾する政治的なパンフレットは刊行せず、彼自身のヒューマニティを強調する物語を書いたが、むしろそれが読者の感情に働きかけ、奴隷制に対する戦いで普遍的なヒューマニティにアピールした。

エキアノはその本の第一章で、エサッカでの落ち着いて生活していた幼少期のことを書いた。彼は自分の社会の有する価値と慣習について次のように

述べている。すなわち、民主的で公正な法律制度の働き、婚姻に対する明確な社会規範、豊かな収穫をもたらす勤勉な労働、そして集落の社会的な活動の一部をなしている歌や踊りのことである。アフリカでの彼の生活を支配していた厳正な社会的、精神的慣行の描写は、奴隷制支持者が提供するイメージ、例えば1775年のバーナード・ロマンスのような場合であるが、すなわち、「不信、窃盗、強情さ、怠惰などは・・・故国 [アフリカ] の生活態度から来たもので、これらの本質は普遍的なものであり、彼らの奴隷状態に由来するものではないことは疑う余地もない、」というものであるが、これに対する注意深い反撃になっている。

後に自著の中で、エキアノは普遍的で基本的な家族の絆を通じて読者に訴え、次のように記している。「私の妹と私はその時、固く抱きあっていたのであるが、引き離された」と。

しかしながら、エキアノは読者に対してアフリカ人の本質的な人間性だけでなく、その平等性についても理解することを望んでいた。彼は奴隷所有者の目ではなく、奴隷の目を通して、自分の奴隷の経験および中間航路（アフリカから新世界への旅）を描写することによって、主人と奴隷、白人と黒人、支配者と被支配者の間のギャップをうめて橋渡しする課題を果たしている。エキアノはまた彼を喜んで教育し、奴隷の生活の貧しさと閉鎖性を劇的に画くために、概して彼を正当に扱ってくれた主人や友人を持った幸運についても書いた。

この奴隷の物語が書かれた宗教的脈絡を知る事は重要である。エキアノは敬虔なクリスチャンであり、彼の信仰が奴隷制を終わらせるための彼の訴えの土台を形成していた。「おお、汝名ばかりのクリスチャンよ！この他ならぬ [奴隷制] は、人にして欲しいと思う事を人にもしてあげなさいと教えたあなたがたの神のもとで行われていることをご存知なのかと、アフリカ人はあなたに訊ねてはならないのであろうか。」エキアノは初めて聖書を読んだ時の経験を書いているが、どのようであったかを声を大にして次のように述べている。「聖書の中に、私の国の法律と規範がほとんど正確に書かれているのを見てまったく驚いてしまった」と。イボ族は意識してはいないがキリスト教徒の社会であるということが、他のキリスト教徒を売買し、所有することは大

問題であるので、廃止論者の話の筋道として大変に重要なのである。もしもエキアノがアフリカ人は正真正銘のキリスト教徒であると、読者を説得できるならば、すべての人は平等であるという彼の議論は顕著に前進することになるだろう。

エキアノの物語の勝利は次の点にあった。つまりそれは偏見や不正義に対する白人読者の目を開かせたが、それはわずかなものであった。またそれは読者に奴隷の所有は乱暴なことであるということを感じさせたが、それは微温的なのである。それは読者にアフリカ人の人間性と平等性を受け入れさせたが、それはきわめて希薄な程度であった。エキアノ以前のフィリス・ウイートレイ同様に、また彼以後のメアリ・プリンス同様に、エキアノは彼の作品を書くにあたり白人の助けを得ていると思われてはいるけれども、彼の物語は世間に十分に受け入れられた。これと対照的に、マンズリ・レビューは以下のように論じた。「この物語は誠意に満ちたもので、作者の見解は優れたものと判断される、」と。

エキアノの生涯と作品はこの時期のイギリス人の行動規範に対して、彼の行動と言葉は受け入れ易かったので、人気のある地位を勝ち得たのである。それにもかかわらず、彼の物語が広く販売され、三十年間に17版刊行され、ドイツ語、オランダ語、ロシア語に翻訳されたという事実は、ひとりのアフリカ人の一生が白人の読者に広く受け入れられたということを意味しているわけである。

エキアノはロンドンの黒人社会のリーダーのひとりであり、広報担当者であり、しばしばアフリカの跡取り息子として知られていたもので、エキアノは奴隷制についての公開討論や廃止運動の重要人物との文通および面談の両方に参加した。彼はケンブリッジ大学のペッカー博士と親しい間柄であり、クラークソンが勝利したケンブリッジの論文コンテストの課題に博士が奴隷制を選択したのは、多分知り合いであるエキアノからの示唆であろう。事実、グランヴィル・シャープに奴隷船ゾング号の裁判を起こすように最初に薦めたのはエキアノであった。彼のホークスベリ卿への手紙は、国会の奴隷貿易調査委員会(1789年)に対し、アフリカとの公正な貿易を進めるための説得力のある議論のために、証拠として提出された。エキアノは、自らの言葉で、

次のように書いている。「アフリカとの通商はイギリスの製造業に対し無尽蔵な富の源泉を開き、これに対して奴隷貿易は物理的な障害である・・・残忍な奴隷制の廃止は製造業の急速で永続する発展を招来するであろう。そして、それは奴隷貿易に何らかの利害を有する人々の主張とはまったく逆なのである、」と。

彼は自分の本の刊行以後、1797年に52歳で亡くなるまで、エキアノは自分の物語を読み、廃止論者の運動を推進しながら国中を旅してまわった。彼のアフリカ人同胞の運動に対する卓越した貢献のほどは、彼が1792年に白人の婦人、スーザン・カレンと結婚したが、その妻とわずか10日間過ごただけで、運動を再開しているという事実がそれを証明している。エキアノは傑出した人物ではあるけれども、彼が唯一というわけではない。彼の生涯の仕事と彼の物語の刊行を通じて、彼はアフリカ人が奴隷制の廃止に積極的に貢献したという重要な証明をわれわれに残してくれたのである。

廃止運動の開始

1785年6月、クラークソンがコンテストに入賞したと発表された。彼は受賞のため、さらに大学理事会館の聴衆に彼の論文を披露するためにケンブリッジへ戻った。賞金を手にロンドンに帰る時も、奴隷制の問題は彼の頭から離れず、クラークソンは、彼の人生が永遠に変化したのは、この瞬間であったことをけっして忘れなかった。ハートフォードシャーのウエイド・ミルの丘に座っている時に、彼は単純ではあるが、論破することは難しい悟りに撃たれた。すなわち、「もしこの論文の内容が真実なら、誰かが最後までこの痛ましい不幸を検分すべき時である。」と。この時の透察の結果、クラークソンは彼のその後の人生を反奴隷制の運動に捧げることになったのである。もしもペッカー博士がコンテストで別の課題を選んでいたら、歴史はどのように織上げられていたかと、想像すると不思議な思いがする。

クラークソンの第一歩は、彼の受賞論文を多くの人々が読めて理解できるように英語に翻訳することであった。彼は論文をさらに良いものにするために、時間を割いた。それから出版社を探しはじめた。出版社を探している時、

彼は同郷、ウイッスビッチ出身のあるクエーカー教徒に出会ったが、彼は当時反奴隷制の出版のほとんどを印刷している本屋をクラークソンに紹介してくれた。手を入れられ、内容の充実したクラークソンの英語版は256ページの、『奴隷制と人間、特にアフリカ人の売買』として、1786年に刊行された。

その後数カ月の間に、クラークソンはすでに反奴隷制の戦いに従事している指導者達に紹介されたが、その中には1787年に結成されたクエーカーの小委員会も含まれていた。クラークソンの決意はすべての者に感銘を与えたが、とりわけ若い事務弁護士のリチャード・フィリップに感銘を与えた。彼は政府の事業と廃止論者が説得を行う上で必要な政治家や役人を大勢知っていた。この二人は協同して仕事を行うことになった。第一ステップは奴隷貿易経営の調査であった。

イギリス人の多くが奴隷貿易に関係していたので、その継続に関心があることは明白であった。ほとんどすべての家族が奴隷制に結びついており、次のように論じることができよう。すなわち、彼らはアフリカで奴隷と交換される品物を生産しているかもしれないし、あるいはアメリカでプランテーションを所有しているかもしれないし、あるいは奴隷船の運航に投資しているかもしれない、あるいはプランテーションで生産されるものをただ食べたり、飲んだり、喫煙したりするだけかもしれないと。

イギリス人は奴隷労働による産品を大量に求めていた。彼らはヴァージニアやメリーランドで栽培される煙草の喫煙に夢中になった。植民地からの輸出は増大を続け、1620年の22,000キロから、1640年の450,000キロ余へ、さらに1775年には1,000万キロに達した。同年、イギリス領西インド諸島は、国民の甘さを求める口を満足させるために100,000トンの砂糖を生産した。砂糖はケーキやプリン材料として、さらにコーヒーやチョコレート（両方とも奴隷労働によって栽培された）といった大衆的な飲み物はもちろんのこと、新たに国民的飲料となった紅茶の甘味料として用いられた。イギリスは西インドからの需要や、イギリスの輸出の40%にあたる大西洋を越える輸出に応えるために、新規に製造所を増設した。イギリスの国庫は紅茶と砂糖の輸入関税の徴収からも利益を享受した。1784年に茶税が減額された時、紅茶を飲むことはさらに人気を高め、苦い味を甘くするために砂糖の需要がまた増大した。

イギリス社会の上層部の人々は、プランテーション所有者の下品な態度を見るにつけ冷笑したけれども、この連中がその貿易から莫大な富を築いたという事を否定するわけにはいかなかった。プランテーション所有者は彼らの富を使って、本国に広大な地所を買い多くの別荘を建てたばかりでなく、奴隷制を支持する政治力をも買取ったのである。

奴隷貿易およびそのイギリスにもたらす利益を受け入れる風潮を感じ取ったので、クラークソンはできるだけ多数の奴隷貿易経験者とのインタビューを開始した。フィリップの援助を得て、クラークソンは税関の記録や奴隷貿易と関係のある船員の提供する詳細な数字の利用が可能となった。これらの記録を分析した結果、クラークソンは奴隷船に乗務した船員の五分之一以上が、その航海で死亡しており、三分の一は他の理由であるが決して戻ることがなかったということを見出した。船員の生命は危険であることは知られていたが、「船員の死亡はアフリカへ向かう船二隻で、ニューファンドランドへ向かう八十三隻以上であった」ということは明白な事実であった。奴隷貿易自体により獣的になったので、船長はしばしば船員達を暴力的に支配した。よくあることだが、帰りの行程ではほとんど人手が要らないので、西インドで無責任に船員を放り出した。また船員達は赤痢や奴隷の反乱の時に受けた傷がもとで死亡した。船主の意識は、利益をあげて売却可能な奴隷の命の方が、次の港で容易に補充できる船員の命よりも価値があるというものであった。

クラークソンが会った証人の一人に、「アメージング・グレイス」（「恩寵を称える」という意味か？＝徳島）という詩の作者としてよく知られる聖職者ジョン・ニュートンがいた。ニュートン自身は、10歳で船員となったが、後に海軍に強制的に放り込まれた。海軍では彼が幼馴染の可愛い子に会うために無許可で船を抜け出したので、幾度か鞭で打たれた。その後彼は他の船員と交換されて奴隷船に乗ることになった。ニュートンはアフリカ海岸で数年働き、奴隷貿易について大いに学んだ。リヴァプールへの帰路、彼は大きな嵐に遭遇したが、生還した。この嵐が原因で彼は熱心なキリスト教の信者になったのである。

ニュートンは奴隷船の船長になって欲しいとの申し出でを受けた時、聖書

は奴隷の所有を非難していないので、彼の宗教上の信念と奴隷貿易への積極的な参加との間には矛盾があるとは思っていなかった。彼はアフリカで奴隷を集め、その奴隷たちをアンティガへ運び、同島の砂糖を積み込んでイギリスへ戻る、14カ月の航海に出発した。1754年までにニュートンは海の仕事を引き退し、クラークソン同様にイングランドの教会の聖職者になった。ニュートンは船長の職席上、反乱を計画した疑いを持たれた奴隷に対する拷問については全然気が咎めなかった。そうした場合に、彼は様々な危険から船員を安全に救出できたことを神に感謝するのであった。しかし、その後、彼は反奴隷制の闘争に参加し、ウィリアム・ウイルバーフォースの宗教面での助言者となったのである。

ウイルバーフォースはヨークシャー選出の国会議員であったが、ヨークシャーは奴隷貿易に利害関係のない例外的な地域であった。主要港のハルはアフリカや西インドとの貿易に参加しない港としては最大であった。27歳のウイルバーフォースは、すでに国会議員を6年勤めていたが、この運動の擁護者を探していた。彼は友人であるウィリアム・ピット首相に、奴隷制は大きな争点になるであろうか、またこの悪に対する攻撃は好転するのだろうか尋ねた。ピットは議会内の誰かが指導者になる前に、ウイルバーフォースが奴隷制に対する戦いを開始すべきであると提案した。彼の政治的なコネクションはもちろんであるが、その他にウイルバーフォースの持つ大きな長所は、演説で人々を感動させる能力であった。作家のジェームズ・ボスエルはウイルバーフォースのある会合に出席してみて次のように考えた。すなわち、「私は壇上で演説する小さな男を見た—完全なシュリンプ（海老）である」（「シュリンプ」という彼の渾名は彼れの身体が小さいということと、ハルの漁業仲間ということの両方に関連している。）が、彼の演説が進行すると、「その小さな男は次第に大きくなり、今やそのシュリンプは鯨に成長したのである、」と。

クラークソンはロンドンのウイルバーホースの家に自分のエッセイを一部置いてきたが、ウイルバーホースがこれを読んだことが、奴隷制こそ彼にとって闘士として戦う課題であると同意させるように導いた決定的な影響力の一つであると思われる。「全能の神が」と、ウイルバーホースはつぎのように断

言している。「私の前に二つの大きな課題を据えた。それは奴隷貿易の廃止とその風習の改革である、」と。奴隷制の廃止を戦うという初期の政治選択は、今や身をもって示す信念となった。クラークソンはウイルバーホースの決意を耳にした時、「生涯で一番幸せな日」であると、言明した。

後日、事態がはっきりするように、奴隷制は他のことでは意見の異なる人々をも統一できる問題であった。クラークソンは多くのことに急進的な変化の強力な支持者であったが、ウイルバーホースの方はむしろ保守的であった。事実、彼は労働者の新しい組織、労働組合は禁止されるべきであると主張した最初の下院議員である。彼は下院の選出方法の変更にも反対した。ウイルバーホースには廃止運動に関する実態や論議に習熟するために援助が必要であったが、この点では教祖的なウイルバーホースにとって学者的なクラークソンが申し分のない助けになった。クラークソンは大量の情報を提供でき、奴隷貿易に反対する運動において決定的な論拠を早く把握することが可能であった。彼らの政治的意見は異なっていたのであるが、二人はすぐに実力のあるチームになれることが分かった。

議会内でのウイルバーホースの声援を期待できるという状態のもとで、1787年にクラークソンは新グループの会合を呼びかけた。彼はクエーカー教徒の委員会の立派であるがつつまし仕事は彼の調査活動におおいに役立ったことを承知しているが、現在必要としていることは、廃止運動に対する大衆の支持を築くための国民的な組織が必要であると考えそのように提案した。それはロンドンに本拠を置く執行委員会によって運営され、社会の特定部分と関連を有しないというものであった。クラークソンはずぐに今後の進め方に関して全員の同意を得ることができた。クラークソンやフィリップスだけでなく、「英国における反奴隷制運動の父」グランヴィル・シャープも、旧来のクエーカー委員会メンバーとともに参加するよう呼びかけられた。

宗教上の非寛容さは、英国国教会に限らず当時のイギリス文化の特徴であった。とくにローマカトリックに対する偏見は法により定められていた。カトリック教徒は医学、法律、軍隊の将校のような専門職につくことを禁じられていたし、下院議員あるいは市町村議会議員になることも阻止された。ある法律ではカトリック教徒は許可無しに5マイル以上旅行することさえ禁じて

いた。そのような宗教上の偏見は、旧来のクエーカー教委員会が直面した大きな問題であった。人間の平等と社会的な肩書きの無視というクエーカーの原則の固執は、肩書きは重要であるとみなしていた当時において、クエーカー以外の人々の感情をしばしば害した。同様に、彼らが文書の中で日や月の名の使用まで拒否（それはローマや古代ノルエーの神神や儀式に因んで名づけられている）しているということが、反奴隷制運動から注意をそらせるために強調された。英国国教会のグランヴィル・シャープが委員長に選出されたことによって、新委員会はこうした問題を回避することができ、ただちに緊急の課題に集中することができた。

新組織の名称は重要な問題であった。組織は奴隷貿易に反対するのか、それとも奴隷制そのものに反対するのかという問題である。前者は奴隷制度全体を取り上げないでは十分に達成することは困難であろう。シャープは後者を主張し、さらに「声を大にして・・・そして両手を天へ向けて突き上げて」、奴隷制そのものが基本的な罪悪であり、もしこの主張に同意しなければ、「神の面前で罪を犯した」ことになると、結論づけた。しかしながら、多数の者はそのようには考えなかったもので、組織名は、「奴隷貿易の廃止を効果的に行う協会」(奴隷貿易廃止協会＝徳島)ということになった。それは政府に影響を与えようとする企図で、大衆の意見を組織する、今日われわれが「圧力団体」と呼んでいる最初のものであった。(※へつづく)

キリスト教と奴隷貿易

キリスト教は奴隷貿易の勃興と衰退の両方に重要な役割を演じた。初期の奴隷貿易業者は、アフリカ人奴隷化を正当化する最大の根拠として、彼らは「異教徒」であるという事実を利用し、彼らをキリスト教に改宗させる努力はまったくしなかった。18世紀を通じて、多くのイギリス人はメソジスト派、バプティスト派、モラヴィアン派という新しいキリスト教の教派に改宗して行った。これらの新教会は志願者を見出し、布教活動の資金を調達するため、西インドにおける奴隷の改宗についての関心を高めた。

当初、奴隷所有者は自分の奴隷が洗礼を受けキリスト教徒になることを嫌

がって許そうとしなかった。ある者は次のようなもっともな質問をしている。「私の奴隷の誰かが天国へ行く可能性はあるのだろうか。そして私は彼らに天国で会わねばならないのだろうか、」と。奴隷達に信者間の神の福音を知らせる事は危険なことに思われたし、奴隷が彼の主人といかなる場合であれ平等であると考えることが許される事はあるのか。しかし伝道師や説教者を質問攻めにして悩ませることによって、奴隷所有者は彼らの奴隷達に、これらの新参者達は彼らと違うのだということをはっきりさせた。奴隷達は彼らの主人が嫌っている者は誰であれ、恐らく自分達の友人であるという単純な論理に従った。しかしながら、伝道師のなかには奴隷とその主人の関係を逆転させないようにという、厳しい指示を受けた者もいた。ジョン・スミス師はロンドン伝道師教会に次のように言われた。「主人に不満を持ち、状況に不満足な奴隷に報いるかもしれない言葉に、あなたが公私いずれであれ気がつかないなんてあり得ない。あなたは彼らを奴隷状態から救うために派遣されたのではなく、彼らに宗教上の地固めをするために派遣されたのである、」と。

そのような警告にもかかわらず、キリスト教化の恐れていた結果が生じ、幾万もの奴隷は、現世においても死後においても、信者は平等であるというメッセージに応じた。多くの者は聖書を読むために読み方を習ったのであるが、そのことは同時に西インドで発行される新聞の反奴隷制運動の報道を自分で見ることができるということの意味していた。幾人かの奴隷達は平和な示威運動を行ったが、多くの場合、この新しい知識は奴隷反乱の数の増大を招いた。ジャマイカで新しい礼拝堂が開かれた時、奴隷達は全員ベンチに座り、白人の主人のために席を空けて立つことを拒んだ。その結果、白人たちは礼拝の間、廊下に立つことを強要されたのである。

その他の反乱はもっと暴力的であった。スミス師はデメララ [現在ガイアナの首都ジョージタウン] に派遣されたのであるが、当地で1823年に、大きな反乱が礼拝の後に起こったのである。三人の白人が殺され、その報復として幾百人の黒人奴隷が処刑された。この反乱の原因を立証する過程で、奴隷所有者は宣教師の役割を強調した。この裁判において、一人の奴隷は次のように公言した。「私は厳粛に告白しますが…そこにはメソヂストなど一人も

いなかったので…反乱などまったくなかったのです」と。一人のイギリスの軍人は反乱に加わった奴隷たちは自由を求めていたのであり、「彼らは皆、日曜日に教会へ祈りに行くのであると強く主張していた」と報告し、この議論を補強した。宣教師スミスはこの反乱の数ヶ月後、共犯の罪で有罪となり死刑を宣告されたが、彼は絞首刑になる前に死亡した。これらの奴隷たちの死、それに続くスミス師の死はイギリスにおいて多くの人々を憤慨させ、彼は「デメララの殉教者」として知られるようになった。

こうした事件があったにもかかわらず、幾人かの奴隷たちは教会の牧師となり、奴隷制の不正義を指摘する説教を行った。おそらく西インドにおける最大と思われる反乱が、1831年のクリスマスにジャマイカで起こった。その反乱の指導者は、サム・シャープという黒人の牧師で、モンテゴ・ベイのバプティスト教会の執事長であった。この「バプティストの反乱」で、あきらかになったことは、14人の白人が死亡し、百万ポンドを超える財産上の損害が出たということである。奴隷主たちは、またしても500人を超える奴隷を殺害し報復した。サム・シャープ自身は絞首刑になったが、彼の最後の言葉は、「私は奴隷制のもとで生きるよりは、あの絞首台の上で死ぬ方がました。」であった。

こうしたプランテーション所有者の行為を批判して、ある牧師は次のように述べている。「最も残忍で野蛮な精神と言うものが証明された・・・私はモンテゴ・ベイに行ったことは一度もないが、人食い人種に囲まれているか、あるいはアジアの野蛮な流民の真っ只中にいるにちがいないと思わざるをえない。」

イギリスでは、これらの宣教師の成功と犠牲が、彼らを派遣した会衆に報告された。その結果、イギリスでは礼拝によく出席する人々は、西インド諸島での事件や新改宗者の解放運動に対する関心を高めて行った。仲間のキリスト教徒に加えられた極めて残虐な行為は、彼らを憤慨させた。また奴隷制ならびに奴隷貿易廃止の多くの請願が教会から始められたということと両立し得ないことなのであった。

奴隷制の最終的な廃止について、西インドのある讃美歌は解放奴隷の立場から、事態を次のように表現している。

私達はもう奴隷じゃない、
キリストが自由にしてくれたのだから、
暴君を十字架に釘付けにし、
そして自由を与えてくれたのだから。

※この新しい組織に対する熱意がふくらんで、クラークソンは自分の書物よりなおいっそう広い読者に届くようにと計画し、短いエッセイ「奴隷貿易およびその廃止の影響についての概括的な見解」を書いた。また彼はますます活発に調査活動を行い、5カ月におよぶブリテン島内の調査の旅に出た。最初の目的地は、ブリストルであったが、同地は奴隷貿易の一大中心地であった。馬車で当地に到着した時、クラークソンは「眼前の…大商業の中心地を破壊しようという自分の立てたこの骨の折れる計画に身震いを感じ始めた。」

彼はブリストルにとって奴隷制が重要であるという、目にみえる証拠として「何百隻もの船がひしめき合ってマストが林立している」、この港を見たのである。ブリストルは奴隷の輸送に直接関係を有することはもちろんのこと、西インドおよびアメリカからの商品、それは大部分奴隷制のもとで生産されたものだが、それらが入ってくる港でもあるのである。クラークソンが奴隷貿易に関係した人々とのインタビューを始めたのはブリストルであった。この調査の旅の終わるまでに、彼はこれまでに奴隷船に乗ったことがあり、またどんな経験をしたかを語った船員2万人以上の氏名を集めていた。彼はそうした話に耳を傾けたが、彼らは宿屋や飲屋で、高い賃金、それはしばしば嘘なのであるが、そうした約束にだまされおびき出された実態を聞き取り記録していった。

奴隷貿易に深く関わっている、もうひとつの重要な港であるリヴァプールを訪ねた時、クラークソンは足枷や手錠さらには奴隷が食べることを拒んだ時に顎を無理矢理こじ開ける道具まで、自由に市内の店で手に入れる事ができるということを自分の目で確認した。

この都市の奴隷制との関係は非常に深かったので、ある人は次のように述べている。「この極悪非道な町の一つ一つのレンガはアフリカ人の血で固めら

れているのだ。」と。奴隷貿易の廃止という観念は、この貿易に経済的に深く依存しているリヴァプールではまったく不人気であった。二度と奴隷船には乗船しないと誓った人でさえも、公然と奴隷貿易に反対であると話すことは躊躇したし、奴隷貿易に反対する運動を組織しようとするれば、誰であれ攻撃される危険があった。クラークソンはすぐに幾人かの男たちが、奴隷貿易を守るために暴力を行使する準備をしていることに気づきはじめた。船員を殺した殺人と関係のある船の航海士を交替させようとした時、彼自身が殺されるであろうと警告されたのである。事実、当時活発な廃止論者であることが実際に危険であることは、少なくともクラークソンの身に降りかかった企てに現れていた。棧橋で暴風雨の成り行きを見ていた時、クラークソンは8人乃至9人の男たちに海に向かって突き飛ばされたが、その中に殺人で告発した者も混じっていた。彼らが海の中へ突き落とそうと狙っていることが分かったので、クラークソンは、「敢えて突進した。彼らの内の一人が…倒れた…私は傷を負うこともなく、彼らの罵声の中を…逃げた。」

しかしながら、クラークソンはこの運動を思いとどまるつもりはなかった。奴隷貿易が作り出した、この腐敗した非人間的なやり方についての証言が蓄積されるに伴い、彼は新しい方法による運動を開始した。彼は社会の奴隷制に対する反対者を統合し、地方グループをスタートさせる提案を行った。これらのグループは、彼の忠言にしたがって、局面を打開するために議会に請願を行うことが可能となった。奴隷制に反対するこの種の最初の請願書は、1783年にブリッジウオーターから提出された。クラークソンは彼らの経験に学び、さらにこうした運動を継続するよう激励するために、この運動の責任者を訪問した。請願は大衆に非常に人気があるということが証明された。請願としての受け付けを拒否された女性の署名数を除外しても、奴隷貿易の規制を求めてマンチェスターが議会に送った請願は署名数10,639であり、それは同市の人口の5分の1を超えていた。

クラークソンがロンドンにもどると、奴隷貿易廃止協会 the Committee for Effecting the Abolition of the Slave Trade のメンバーは30名になっていて、その中には陶芸家でクエーカーの産業家、ジョサイア・ウエッジウッドも含まれていた。彼のこの運動への最も記憶に値する貢献の一つに、彼の

職人ウィリアム・ハックウッドのデザインになる「私は人間でもなく、兄弟でもないのか。」と名づけられた、鎖に繋がれたアフリカ人が膝まつき見る者に両手を差し出している図柄があった。このイメージとスローガンはさまざまな商品に広く取り入れられ生産された。富の力で、男たちはその図柄の金製の嗅ぎたばこ入れを買うことができたし、女たちはその図柄のブレスレットやヘアピンを身につけることができた。クラークソンはファッションが正義を促進するということをはっきりと認めていた。

委員会は結成初年度末までに、51,432冊の書物と冊子さらに26,536部のレポートや新聞を発行した。そして100件を超える請願書が議会に提出されたのである。支持者をふやそうとパンフレットを発行するやり方はけっして目新しいものではなかった。というのは、読み書きできる人は急速に増大し、今では成人の60%が読み書きができるのである。しかしながら、男性のわずか10人に1人（女性は皆無）しか投票できないという時代であるから、大衆的な草の根運動を構築するために、請願により支持を宣伝していくやりかたは、変化を求める画期的なやり方であった。

大衆的な支持が頼りではあるけれども、委員会としては常に、「暴動」に駆り立てられないように注意しなければならなかった。というのは、プロテスタントの下院議員であるゴードン卿がカトリック教の制限解除に反対して、5万人の大衆を議会へ請願に動員した時に起こったゴードン暴動からまだ8年しか経っていないのであるから。この暴動は一週間続き何百人の人々が死傷した。そして秩序を回復するためには1万に達する軍隊が必要であった（暴徒によって家を焼かれた人の一人が、判事マンスフィールド卿であった）。当然のことであるが、委員会はクエーカーと深い関係があったので、暴力的な方法を用いることは考えもしなかったが、社会不安を扇動しているという非難は、廃止運動に大変な損害を与える可能性があったのである。

たとえ首相のウィリアム・ピット自身は廃止に賛成であっても、奴隷貿易反対の議会法を通過させるためには苦闘するであろうと判断していた。非常に多くの下院議員や上院の世襲貴族は、個人的には奴隷制に利害を有するので、この提案は政府を分裂させた。多くの人々は奴隷制は道徳的な根拠に基づいて正当化することは困難ではあるけれども、イギリスが豊かで強力な国

家になるためには継続しなくてはならないと信じていた。そこで、まず法制度を確立することが決定的に重要なことであり、さらに奴隷貿易の継続が結局の所イギリスの利益に反するということを認めさせることが特に重要である。

1788年2月、議会は枢密院の貿易とプランテーション委員会に対し、アフリカとの交易、とくに奴隷貿易について集中的に調査するよう求めた。ピットは議会の会期が終わる前に法案を提案できるようにするために、枢密院の調査が短期間で終わることを望んだ。委員会はクラクソンがフィリップの法的援助を受けて、廃止の主張を準備すべきであることを確認済みであった。その主張を述べる段階を迎えた時、委員会ではその終了についてほとんど議論をしていないのだが、奴隷貿易を支持する立場の人々は、奴隷貿易が何故許容されるべきかについての証言は継続するよう求めた。クラクソンは以前リヴァプールで会った時には、廃止を支持すると約束していた男が、ロンドンに着いてからは、「黒人の自由は今や好ましい考えではあろうが、イギリス人の合法的な所有（奴隷の＝訳者）継続の自由は忘れられるべきではない。」と、論じているのには特に落胆した。しかしながら、はるかに少ない人数ではあったが、委員会の証人とクラクソンの詳細な調査は、奴隷貿易は中止すべきであると多くの人々を納得させた。

奴隷制の賛成、反対の議論は、白人のイギリス人によって指揮されたが、われわれは黒人もまた奴隷貿易に反対し、廃止に好意を持つ白人の道徳的な議論の説得を試みたことも忘れるべきではない。事実、少数ではあるが、ロンドンで生活しているアフリカ人によって表明された意見の記録がある。ジョン・ヘンリー・ナインバナは、シエラレオネのナインバナ王の息子であるが、教育を受けるためロンドンに滞在していたが、奴隷貿易に関する議論において、奴隷制支持者の証人が、彼の同族の人々をととても低俗な言葉で論じているのを耳にした。彼は演説者の意見を聞いて悲しみ、憤慨し、明敏で力強い次のような演説を準備した。

万一、人が私を殺そうとしたり、私の家族を奴隷として売ろうとしたとすれば、彼は殺したり、売り飛ばしたりした人数と同じぐらい多数の者を傷つける事になるだろう。しかし、もしも誰かが、黒人の品格を持ち

去ったとしよう。それ以後、黒人に向かってしてはならない事など何もないのだ。例えば、件の男は黒人を殴り、こう言うであろう。「おお、ただの黒人に過ぎないのだ。どうして殴ってはいけないのか。」件の男は黒人を奴隷にするだろう。彼は黒人の品格を持ち去って、次のように言うだろう。「おお、彼らはただの黒人に過ぎない。どうして奴隷にしてはいけないのか。」 件の男はすべてのアフリカ人を連れ去ろうとするだろう。もし彼が全員を捕まえることができ、あなたが彼に、「なぜ、すべての人々を連れ去るのだ。」と、訊ねると、彼は、「おお、彼らは黒人に過ぎないのだ。彼らは白人とは違うのだ。どうして彼らを連れ去ってはいけないのだ。」と、言うだろう。私が件の男を許せない理由は、彼が私の国の人々の品格を掠め取ったからである。

議会での最初の投票

廃止論者は支持を獲得したにもかかわらず、調査が予想よりも長くかかったし、当該会期中に法案を持込むには遅すぎた結果、奴隷貿易はかろうじて勝利した。首相ピットは、1788年5月9日に、議会がこの懸案を早々に次期の会期に討議するよう措置を講じた。下院にこれまで上程された中で最も重要な議題であると、彼は述べたが、その時までは本件は議論すべきではないと声明した。

数人の廃止論者である下院議員は首相の要求を無視した。この遅延は1万人の命を犠牲にするであろうと、指摘した。チャールズ・ジェームズ・フォックスは積み上げられた請願書を指差して、この奴隷の「恥ずべき売買」は遅滞なく破壊されるべきであると要求した。奴隷制に関する最初の議会での討議は進行中であった。最終段階に達した時、ピットの決定は反対されなかった。反対論者が議論において勝利したことは明白であった。そこで、協会は討議内容を1万部印刷して大衆に配布した。

二週間経過して、無所属の下院議員ウィリアム・ドルベン卿は、奴隷船の乗船の規制に関する法案を上程したが、これは一隻の船が運ぶことのできる奴隷数を制限することを内容とするものであった。もう一つの聴聞が行われ

たが、それには多くの奴隷制支持の証人が検証のために召喚された。一人の証人は次のような証言さえしたのである。「アフリカから西インドへの航海はニグロの生涯で一番幸せな時であった、」と。奴隷貿易廃止協会はこれに対応してもはや新しい証人をたてることはしなかった。そんな必要はなかったのである。クラークソンの示した数字とピットの委嘱した報告書で武装したことにより、奴隷には「十分な空間と十分な空気そして十分な食糧」があるという論拠は完全に覆された。オーストラリアの過酷な植民地へ運ばれる囚人達でさえ、奴隷船における空間の二倍も確保されていたのである。

そのような有無をいわせぬ証拠を持っていても、ピットは彼らがドルベンの提案する法案を支持するまで、閣僚を選挙で脅かさねばならなかった。それは、1788年7月11日に法律となり、男は縦182センチに幅41センチ、女は152センチに幅41センチ、少年は152センチに幅36センチ、少女は137センチに幅30センチがスペースとして許されることになった。この法案は状況の改善を意味したが、奴隷たちは、特に6カ月も船上で過ごさねばならぬということを考えれば、依然として窮屈であった。

強制された航海中の奴隷たちの居場所の単なる改善が協会の目的ではなかったけれども、クラークソンは次のように確信した。「これは現在手にできる最善の法案である、」と。またクラークソンは次のような不満を抱いていた。「彼らの苦しみは少しは消えるかもしれないけれども、生存者は奴隷になる運命にあるのである、」と。しかし、彼の見通しとしては奴隷貿易は一年以内に廃止されるであろうと思われた。実際には、奴隷貿易が不法として禁止されるには、さらに10年余を要したし、この新制限のもとでも、じきに以前よりも巨額の金銭が転がり込んだのである。(つづく)